グループウェアで病院訪問学級を結ぶ
離れた学級の児童・生徒同士で交流

沖縄県立総合教育センター　幸地英之指導主事（前・沖縄県立森川養護学校）

＜プロジェクト以前＞

沖縄県の特殊教育諸学校には平成3年ごろからコンピュータが導入されるようになりましたが、当時は入力装置がキーボードだけという場合が多く、障害のある生徒にとって活用が難しい状況がありました。そうした時、国立特殊教育総合研究所の成田滋先生が、雑誌にMacitoshの活用事例を紹介しているのを見て、マウスによる操作や音声の録音再生機能が有用であることに気づきました。そこで、予算的には厳しかったものの、Macを購入し実践しました。また、県内ではMacユーザが少なかったので、パソコン通信で情報交換しなければならなかったことも、後から考えると非常に大きな影響を与えるきっかけになっていたのだと思います。

実践の経過、教訓

県などに積極的に働きかけ

100校プロジェクトについては、パソコン通信で情報は入ってきていて応募しようとしたのですが、養護学校には県から話が回ってこなくてがっかりした記憶があります。その後、森川養護学校（病弱・虚弱）に転勤になり、身体的な機能に障害がある児童生徒たちへ「身体機能の代替・拡大」ということへの取り組みを始めました。

平成７年の夏に沖縄県が第三セクター方式のプロバイダを立ち上げ「沖縄においても個人でインターネットが利用できるようにする」ことを聞きつけ、私を含め３人の教員でチームを組み、プロバイダや管理職、教育委員会との交渉を行っていきました。100校プロジェクトに採択された美里高校（当時）の本村先生とも連携をとりながら県内の学校で情報交換ができるようにメーリングリストも運用を始めたりしました。

独自の取り組みでは限界があり行き詰まろうとした時期もありましたが、文部省（現・文部科学省）の「インターネット利用推進協力校」、「病弱養護学校におけるマルチメディアを活用した補充指導」指定校を引き受けることで継続できるようになりました。同時に、学校内のサポート体制としても、毎年5月から7月にかけて一人あたり10日間の研修を受けてもらうことで全体が同じようにレベルアップされていき、12年度には、指導できる教員が100%に達するなど校内での広がり・継承もスムーズにいきました。

Eスクエア・プロジェクトとしては、「ネットワーク管理者養成講座初級編」（11年度）を企画し、県内の多くの学校に勉強会への参加を呼びかけるなど、ネットワークに関心のある先生方の発掘を行ってきました。「病院訪問学級との共同学習環境の構築」（12年度）では、ネットワークを活用していく場合に

病院訪問学級との共同学習環境の構築

森川養護学校には、沖縄病院のほかに9つの訪問学級が設置され、各訪問学級では担当職員が一人で数人の児童・生徒の指導に当たっている。

平成11年度に訪問学級にもインターネット環境が整備され、教室でホームページを見たり、電子メールで前籍校の友達とやりとりをするようになった。

その取り組みを発展させ、訪問学級の児童・生徒だけが入ることのできるグループウェアを使用して、離れた場所にいる児童・生徒たちが話し合いや連絡ができるようにした。

具体的には、個々人に電子メールアカウントを発行し、次の３つの会議室を設けた。

・みんなの部屋：児童・生徒も教師もともに読み書きできる。
・生徒の部屋：児童・生徒は読み書きでき、教師は読むことだけができる。
・先生の部屋：教師だけが読み書きできる。

http://www.cec.or.jp/es/E-square/gakko/h12houkoku/20_51.htm

必要とされる生徒の情報の保護や、どのコンピュータからでも同じ情報にアクセスできるようにグループウェアで行いました（囲み欄参照）。

交流学習の事前授業風景

これらの取り組みは、11年度のEスクエア・プロジェクトに参加した先生を中心に、「南島（なんとう）スクールネット研究会」へと発展させるきっかけとなり現在も続いています。

生徒が自信を持つ

ICTを導入した効果の第1は、当時はインターネットの初期の段階で、障害のない児童・生徒と同じスタートラインに立つことができ、障害に関係なく同等のことができることがわかり、生徒たちに自信を持たせることができたことです。

第2は、ネットワークを通して、外部の人との交流が確実に行えるようになったことです。それ以前は、病院に入院したままどこにも出かけないで過ごす場合が多かった生徒が、ネットワークを通じて友人を増やしたり、ネットワークを介して仕事もするという事例も生まれました。

第3として、卒業生の一人は、寝たきりの状態でもコンピュータで家電を操作したり、玄関の開け閉めを行う、あるいはコンピュータグラフィックの仕事を行う、とICTが生活の武器にまでなっていることです。

継続させていくための苦労

また、養護学校全体で考えると、「リーダーとして継承する人がいない」ことが課題です。コンピュータやネットワークの整備は教育委員会が行うようになり、活用方法がある程度形として見えてきたことで多くの人が使うようになり裾野は広がりました。しかし、公立学校では担当職員の人事異動等もあり継続した指導が難しくなることがあります。コンピュータの進歩や社会の状況をふまえて、新しいことへ取り組む人材の育成をしていかなければいけないと考えています。

10年間を振り返って

「選考漏れ」がICT活用の原動力

「100校プロジェクトに漏れたこと」と「生徒に教えられること」がICT活用の原動力です。前述しましたが、沖縄県の場合、養護学校には枠が回ってきませんでした。「このままでは、養護学校が最後になる。いつまでもお荷物的な存在でしか扱われないのではないか」との思いを感じたのが、その後の推進力になりました。

また、生徒の中にはいつ死ぬか分からない状況の子もいて、肝の据わった生き方をしている。いろいろと教えられることが多いわけです。

＜成功の秘訣＞

先生方に対する支援について、いくつか上げさせていただきます。

●新しい実践でなくてもよい

先生方を支援する側は、あるものをできるだけ具体化して示すとよいと思います。その実例を見せながら支援すると、先生方は案外楽に実践してくれるものです。そのためには、アドバイスや情報の提供を具体的に行うことが重要です。

●ワンポイントでもよい

コンピュータやネットワークを使って、「私は何をすればよいか」と疑問を持たれる先生が多くいらっしゃいます。また、先生方は「コンピュータを使えなければならない」、「コンピュータを使って指導できなければならない」といったことがすごいプレッシャーになっているようです。しかし、実際はコンピュータの操作はできているが、どんな場面で使ったらいいか分からないだけの場合が多いのですね。そういう時、私は「必ずコンピュータを使わなければならないわけではありません。その子どもに一番必要なものは何ですか。それを解決するときにコンピュータが必要であれば使う、というスタンスでいいですよ」と言っています。